

夏目漱石とクラシック音楽

(第12回)

横浜開港記念日の鷗外と漱石

音楽学者・元東京藝術大学特任教授
瀧井 敬子

安政6年(1859)6月2日、横浜港が開かれた。そのときから数えて、今年(2019)で160年。横浜は6月、開港記念の祝賀イベントに沸いた。

開港50年(明治42年(1909))には、大がかりな記念祝典が催された。メイン・イベントは、森鷗外の作詞による「横浜市歌」の発表であった。以来、横浜市民はこの市歌を大切に歌い継いでいる。私は中学生の時、最後の1年間だけ、横浜市立老松中学校に通った。この市歌を幾度か歌った思い出はあるが、鷗外が作詞したとは、まったく知らずに歌っていた。

「横浜市歌」は、異例なやり方で作られている。森鷗外のたつての希望で、作曲が先で、作詞は出来上がった曲の楽譜を見て、日本語を^は埋め込むというやり方がされた。語彙が豊富な鷗外には、いわばゲーム感覚での作詞である。彼は横浜の歴史と未来を巧みに織り込んだ賛歌を、瞬時にして作った。「横浜市歌」は3番までである。

作曲を担当したのは、東京音楽学校助教授の南^{よしえ}能衛(1881-1952)であった。

明治42年6月6日(日)、陰。…南音楽学校より電話にて予を招く。往きて横浜市歌の譜を見て、直ちに填詞す。(鷗外の日記)

この日記から分かることは、鷗外は短い簡単な曲ならば、楽譜が読めたということである。何拍子の曲であるか理解し、音符や休符の見分けが

き、音楽的フレーズと詩のフレーズを合致させることができたということである。

明治42年6月17日(木)、半陰。…横浜市歌の印刷成る。(鷗外の日記)

明治42年6月18日(金)、晴。横浜市歌を南能衛に送り遣る。(鷗外の日記)

印刷譜に誤りがないか、南に最終的なチェックをさせたのであろう。開港50年の記念祝典の日の7月1日の2週間前のことであった。

明治42年7月1日(木)、陰。時々雨降る。横浜に往き開港五十年記念祝祭に参列す。始て横浜市歌を奏するを聞く。(鷗外の日記)

一方、夏目漱石は、開港50年祭への招待状を友人の渡辺和太郎(1878-1922)からもらったが、行かなかった。和太郎の父は横浜正金銀行頭取であった。6月30日は座敷にピアノが運び込まれ、漱石の家は朝からてんやわんやの大騒ぎ。筆子のピアノの先生、中島六郎がいつまでも帰らないので、『それから』の連載中(第一回を6月27日に発表)にもかかわらず、漱石は一行も筆が進まず、翌日の開港記念の祝賀式典どころではなかった。

ところで、開港100年の1959年から、市立の小中学校は開港記念日に休校となった、1960年の私は老松中学の3年生であった。国際仮装パレードを見た後、母とニューグランド・ホテルで食べたハイカラなカレーの味は忘れられない。